

# カナダの朝鮮戦争参戦

## ——「忘れられた戦争」をどう記憶すべきか

李 泳 采 (恵泉女学園大学)

### はじめに

この論文の目的は、カナダの朝鮮戦争参戦の背景とその影響を分析することである。カナダは1950年6月から53年7月までの朝鮮戦争期間中に、2万6700余名の軍人を派兵しており、そのうち516名が戦死した。国連軍派兵国のなかでアメリカ、イギリスに続いて3番目に多くの兵力を派兵していた。犠牲となった516名のカナダ軍人は、現在、釜山の国連軍墓地に埋葬されているが、このうち21名の遺骨はまだ発見されていない。

カナダは歴史的にイギリス連邦国の一員であり、ヨーロッパ国家としてのアイデンティティをもっている国であった。北大西洋の一員という認識が強かったカナダが、なぜ東アジアの朝鮮半島問題にまで関与するようになったのか。彼らは、朝鮮戦争をどう理解していたのか。朝鮮戦争への参戦はカナダのアイデンティティにどんな影響を与えていたのだろうか。

朝鮮戦争は、ソ連の支援を受けた北朝鮮の全面攻撃によって1950年6月に始まった。最初は南北間の内戦という側面があったが、その後、アメリカと中国が介入して東アジアの地域紛争へと拡大した。また、国連加盟国21カ国が参戦した国際戦争でもあった。アメリカ・イギリスとソ連・中国がなぜ朝鮮戦争に参戦したのか、その背景と影響に関しては、各国の国立公文書館が公開した資料に基づいて、多くの研究がこれまでなされてきた(参考文献リスト参照)。

最近、南アフリカ、トルコなど朝鮮戦争に参戦した第三世界の国家については、いくつかの研究論文が、その地域研究者によって書かれているが、朝鮮戦争の仕組み全体を理解するまでの研究には至っていない。この論文では、カナダをはじめ多くの国々で「忘れられた戦争」と

して認識されてきた朝鮮戦争を取り上げて、朝鮮戦争に対する国際社会の認識、カナダの参戦背景、特に、戦後カナダの外交において、国連中心主義がなぜ生まれたのかという点を考察する。

### 1. 朝鮮戦争勃発以前のカナダと韓国の関係

カナダと韓国の関係は、1888年トロント出身のジェームズ・スカス・ゲール (James Scarth Gale) という宣教師が、韓国に派遣されたことから始まる。ゲール宣教師は、韓英辞典を初めて発行して、英語の聖書をハングルに翻訳した。また、韓国の歴史に関する書籍を英語で出版した。彼は、高宗皇帝の侍医を務め、現在のセブランス病院を創設したことで知られている。それ以外にも、カナダ人のフランシス・スコフィールド (Francis Schofield) 博士は、日本植民地に対する抵抗運動である1919年独立運動に協力した功績が認められ、外国人として唯一韓国の国立顕忠院愛国志士墓地に埋葬されている(カナダ外務省HP,2019)。

戦後、カナダと韓国との公式的な関係は1947年、カナダが韓国における単独選挙を監視するために、国連韓国臨時委員団 (United Nations Temporary Commission on Korea) に参加したことからはじまった。モスクワ3相会議 (1945年12月) に基づいて、翌年3月から朝鮮問題の解決のために開催された米ソ共同委員会は、47年10月ごろには事実上決裂状態になった。1947年10月、自由党国会議員で国連派遣大使であったジョセフ・アーサーブラデット (Joseph-Arthur Bradette) 氏は、初めて行われる韓国での単独選挙に関して、アメリカの立場を支持した。彼は「カナダには北太平洋の一員としての役割が

ある」と述べ、初めてアジアとの関係を強調した。当時、カナダ首相だったマッケンジー・キング (Mackenzie King) 氏は、「国連はカナダを破滅へと導くだろう。ブラデットが韓国について語っている」といい、国連を通じてカナダがアジアの問題に介入することについて否定的な立場であった (Ted Barris, 2002)

しかし、アメリカが国連を政治的に活用して韓国問題に介入するようになると、カナダもこれに同調するようになった。カナダが国連を通じて韓国問題に介入することに否定的だったマッケンジー・キング首相が老齢で辞任した後、後任としてルイ・サンローラン (Louis St. Laurent) 首相が1949年の選挙で登場した。彼は、UNとUNTCOK (United Nations Temporary Commission on Korea; 国連韓国臨時委員団) を支持し、1949年には韓国を国家として公式に承認した。

## 2. 朝鮮戦争とカナダの参戦背景

### 1) 朝鮮戦争勃発とカナダの認識

1950年6月の朝鮮戦争勃発当時、カナダのアイデンティティは、太平洋国家の一員というものではなかった。イギリス連邦に属していたカナダは、北大西洋国家の一員であり、政治経済面でもヨーロッパとの関係が密接であった。冷戦構造の認識においても、東アジアの中国や北朝鮮ではなく、ソ連からの脅威を重視していた。

カナダは朝鮮戦争勃発直後でも、アジアへの介入は、非常に限定すべきと考えていた。カナダのアジア認識は、主にインドに限定されており、インドとの友好関係を維持するために、インドを欧米国家の一員に加えるための外交に専念していた。また、アメリカやヨーロッパの他の植民地支配国家とは違い、カナダはイギリス連邦から独立した国として、脱植民地主義を選択する国々を理解しようと努力していた。

このようなカナダのアジア認識は、朝鮮戦争時期に顕著であった。カナダは、朝鮮半島におけるアメリカの政策に関して、共産主義の拡張阻止については同意していたが、朝鮮戦争の性格についての認識は、アメリカ政府とは異なっていた。

1950年6月24日、土曜日の夜、国連を通じて北

朝鮮の南侵が伝えられたとき (韓国では、6月25日の未明)、カナダもこれに驚き、失望した。しかし、アメリカがこの問題に直接軍事介入するとは思わなかった。国連は新生組織で、明確な力 (武力) を持っていなかった。アメリカも5カ月前の50年1月、アチソン国務長官の演説を通じて、韓国は「(アメリカの東アジア) 生命線ではない」と宣言していたからであった。1950年6月26日、月曜日の夜、レスター・B・ピアソン (Lester B. Pearson) 外務長官は、「オタワから私たちが何かをする前に現在の 이슈は終わるだろう」と語った (Greg Donaghy, 2002)。

国連安全保障理事会 (UN Security Council) は、翌日25日、日曜日の午後、特別会議を開き、朝鮮半島での戦闘中止と北朝鮮軍の38度線撤収を決議した。その理事会にソ連は不参加で、ユーゴは棄権した。また、アメリカのトルーマン大統領は、38度線以南に限りアメリカの海軍と空軍の作戦を承認した。6月27日、月曜日の朝、アメリカのこのような決定がカナダの内閣に伝えられると、ピアソン外務長官は、慎重な行動をとった。共産主義勢力の攻撃に対して、アメリカによる集団的自衛権発動措置については認めたものの、国連安全保障理事会決議の前に、アメリカの軍事作戦が発動されることについては警戒していたのである。

当日、午後、カナダの閣議でピアソンは「韓国に限定して軍事支援をすることにしたアメリカの段階的決定を歓迎」しながらも、「国連のアクションがより効果的でいだろう」と述べて、アメリカの軍事介入については国連安全保障理事会の承認を要求していたのである。また、首相ローランも6月28日、「韓国に (直接) 支援する前に、国連による支援が強化されなければならない」と新聞で言及した (Greg Donaghy, 2002)。

しかし、北朝鮮軍の破竹の進撃によって、2日間で韓国の状況がさらに悪化した。韓国政府は大田に首都を移転し、北朝鮮軍は6月28日、ソウル市内に進入した。トルーマン大統領は、「朝鮮戦争は共産勢力が韓国を共産化するために挑発した不法南侵」という声明を発表して、同日「マッカーサー元帥を韓国作戦の最高司令官に任命」した。

カナダ国内でも、韓国の状況についてカナダ

の貢献が必要だという世論が優勢であった。アメリカ政府高官も「国連の名で韓国の正常回復を支援するためにも、カナダの行動が必要だ」と主張した (Greg Donaghy, 2002)。この発言は、アメリカも国連の枠を活用して対応する必要性を感じているというシグナルでもあった。1950年6月29日、カナダの内閣は、朝鮮戦争へのカナダの参戦を正式決定した。その日の夜、ピアソン外務長官は、「カナダは国連が統率・支援する提案があれば参加する」と発表した (Ted Barris, 2002)。

このようにアメリカが単独ではなく、国連の承認の下で朝鮮戦争に軍事介入するにあたって、カナダが大きな役割を果たしていたといえる。ピアソン外務長官は、アメリカ軍よりは国連司令官と国連軍の力がより強化されるべきだという点も強調した。つまり、カナダは戦後新秩序のなかで、朝鮮戦争への介入を国連の権限を強化する契機とみていたということである。

一方で、アメリカには国連での主導権を強化しようとする意図があった。国連安全保障理事会は、6月29日、韓国への軍事支援について決議案を採択した。アメリカの指揮命令の下で連合軍を運用するという内容だった。これは、軍事作戦において、アメリカの主導権が確認されたことを意味する。決議案通過の直前、アメリカの主導権を強調する文言が、アメリカによって付け加えられ、カナダの意図とは違う方向に軍事介入案が決議されたのである。

## 2) 国連の役割を強化しようとするカナダの参戦と地上軍派遣

朝鮮半島への軍事介入において国連の役割が限定される中、カナダは地上軍の派兵についても難しい問題に直面した。アメリカが国連を活用しようしたのは、結局国連加盟国の朝鮮戦争参戦と地上軍派兵を要求するためでもあった。地上軍派遣についてカナダは、世論を意識せざるをえなかった。カナダは、当時、ヨーロッパとの連携と、国内における最小限の治安のための兵力程度の地上軍しか保有していなかった。カナダの国内には「韓国は米ソ冷戦の中心ではない。ヨーロッパは、まだ共産主義の脅威にあり、私たちの関心がヨーロッパから韓国に移ってはいけない」という意見も多くあった (Brent

Byron Watson, 2007)。

結局、7月18日、カナダ国防委員会は、韓国への派兵を決定した。しかし、この決定は「ヨーロッパや北米で有事が発生したら、カナダ軍はすぐ帰国する」という条件付きであった。イギリス、オーストラリア、ニュージーランドも7月25日、地上軍派兵を決定した。しかし、この時点でもカナダのピアソン外務長官は、アメリカのアチソン国務長官との協議で、朝鮮半島とヨーロッパにおける冷戦構造の関連性を強調していた。アチソンは、ソ連がヨーロッパに介入すれば、アメリカと連合軍は朝鮮半島から即刻撤退することと、中国との戦争は避けるという点を強調した。

カナダは、派兵決定直前までヨーロッパでの共産主義からの防衛について憂慮しており、朝鮮半島については直接的な介入を躊躇していた。8月中旬、ピアソン外務長官は、アメリカのアチソン国務長官に送った手紙で、台湾の孤立と中国との衝突の可能性について言及している。カナダは、アメリカの極東での役割について憂慮しており、またインドの立場についても戸惑っていた。インドは、朝鮮戦争への派兵を拒否し、7月4日、米ソ両国に朝鮮戦争の仲裁を要求していた。

8月7日、カナダ内閣は国連の名前で朝鮮戦争に参戦する新しい兵士を募集することを正式に決定した。彼らは、スペシャル部隊 (Special Force) と規定され、突然の募集だったため人員拡充が困難で、複数回にわたり入隊を呼び掛けた。また、兵士の訓練も派兵に間に合わず、韓国への移動中に一部教育を受けるなど、派兵準備の時間が非常に不足していた。これに先立ち、カナダ政府は海軍の駆逐艦2隻と空軍の派兵を決定した。カナダ軍が釜山に到着したのは、朝鮮戦争勃発から5か月近く後の11月7日であった (Ara Kermoyan, 2002)。

カナダ軍が戦場に投入された頃、戦況は大きく変わっていた。9月15日、マッカーサー司令官が率いる国連軍の仁川上陸作戦が成功して、韓国軍と国連軍は9月27日ソウルを奪還した。韓国軍と国連軍は10月9日、38度線を突破、10月19日には平壤を占領した。これに対抗して、中国は朝鮮戦争への全面介入を決定した。中国人民志願軍は鴨緑江を渡って集結しはじめた。

仁川上陸作戦以降、米軍が38度線を越えて北進作戦を遂行すべきかどうかについて論議していたとき、カナダのピアソン外務長官は「国連軍によって韓国が統一されることは喜ぶべきことだ」という国連主導の役割を強調した。一方、インドは外部の武力によって韓国が朝鮮半島を統一することについて批判する声明を発表しており、カナダはインドのこのような態度に不満を表明した。8月30日、アメリカのアチソン国務長官は、「北朝鮮が降伏しないならば、国連軍と共に38度線を突破して北進する」という通牒を送った（Hastings, Max, 1988）。

### 3) 停戦委員会におけるカナダの活動と休戦協定の成立

カナダ陸軍が釜山に到着した11月中旬以降、国連軍は中国軍と対峙するようになった。カナダは中国の参戦が顕著になったことで、改めてアメリカを説得するために、フランスとイギリスに対して、非武装地帯の設定を決議するように要求した。11月25日、アメリカ第8軍の大攻勢に対して、中国軍は西部及び中部戦線で、60万名の兵力による人海戦術で総反撃戦を開始した。その結果、防御線が崩れ、アメリカ軍と国連軍の南への撤収が始まった。11月30日、ソ連は国連安保理で、朝鮮半島から中国軍の撤退を直ちに要求する案について拒否権を行使した。そうすると、アメリカ政府内では中国軍に対する原爆使用について議論されるようになった。アメリカ国内世論も原爆の早期使用には反対しているが、使用不可欠論は強くなっていった（金学俊, 1989）。

トルーマン大統領が原爆使用の可能性について言及すると、カナダは衝撃を受けて、これに反発した。カナダは、12月1日、国連各国の代表者たちとともに、原爆使用より中国の韓国からの平和的撤収案を検討することを提案した。12月4日、ピアソン外務長官は国連本部で停戦委員会設置を主張する演説を行った。これに対して、トルーマン大統領とイギリスのアトリー首相は12月6日の会談で、中国への宥和政策は不可能で、北大西洋条約機構（NATO）加盟国の軍事力強化に合意し、カナダによる停戦委員会設置の動きを警戒した。韓国政府も12月9日、国連停戦委員会の対中国宥和政策について不当性を

表明した（Greg Donaghy, 2002）。

興南撤収及び長津湖撤収が実施されるなか、今度は、12月10日、カナダとイギリスの首相が会談し、韓国及び世界情勢について協議した。12月13日、国連総会は参戦国13カ国が提案した朝鮮戦争決議案に基づいて、停戦のための三者委員会の設置案を採択した。

カナダは、停戦委員会に参加して、停戦協定に非常に積極的であった。その理由は、1) 停戦委員会が実際に、朝鮮戦争の停戦の可能性を探ることができると確信していたこと、2) 国連軍が38度線を突破して北進作戦を遂行していることについて、カナダにはアメリカおよびヨーロッパ社会の認識と、インドを中心としたアジア各国の認識のギャップを縮める必要性があったこと、3) 第3世界諸国が多く参加している国連が、中国を朝鮮戦争の侵略者として非難するアメリカの協定案を理解するには、時間が必要であった、からである（John Melady, 2012）。

しかし、アメリカのトルーマン政権および韓国の李承晩政権は停戦に反対で、国連停戦委員会の役割についても批判的であったため、三者委員会の活動も制約を受けていた。結局、1951年2月、国連が中国を非難したため、カナダを中心にした国連側の停戦のための努力は失敗に終わった。

カナダは、アメリカと共産圏の認識のギャップを埋めるためには、国連の役割がさらに重要だと考えていた。捕虜交換をめぐる交渉案についてもカナダは、人道的レベルの「自己決定権」を強調する第三の案を提案し、その案が実質的に両陣営の意見をまとめたことになる。

1953年2月、スターリンが亡くなった後、ソ連の朝鮮半島政策も転換され、休戦交渉は急激に進展した。ついに1953年7月27日、板門店で韓国を除いたアメリカ、中国、北朝鮮によって、休戦協定が調印された。戦争勃発から3年1ヶ月ぶりに朝鮮戦争は、結局勝敗を決することなく、休戦になったのである。

### 4) カナダ軍が参戦した加平戦闘の意味

韓国と国連軍は、仁川上陸作戦、長津湖戦闘、多富洞戦闘、加平戦闘を朝鮮戦争で勝利した主な戦闘として挙げる。カナダ軍が参戦していた加平戦闘はどういう戦闘であったのだろうか。

1950年9月、仁川上陸作戦以降、国連軍と韓国軍は反撃に出て、北の鴨緑江流域まで進撃していった。ところが、中国軍の介入で、1950年12月、再び38度線以南地域まで後退した。さらに、1951年1月4日には、ソウルを放棄して、平澤と三陟を結ぶ北緯37度線地域まで追い詰められた（1・4後退）。しかし、戦列を整えた韓国軍と国連軍がすぐに反撃に出て、3月15日にはソウルを奪還、4月には既存の38度線地域まで進出した。

これに対応して、中国軍と北朝鮮軍は、70万名に及ぶ大規模兵力を動員して、5月1日以前にソウルを再び占領することを目標に大攻撃を行った。第9軍団に配属された韓国軍第6師団は、1951年4月17日にイギリス連邦軍第27旅団と交代し、京畿道加平溪谷に沿って金化方面に進撃していった。さらに、4月22日に第6師団は、史倉里で中国軍第20軍第60師団と第40軍第118師団の攻撃を受けた。

さらに、イギリス連邦軍第27旅団は、史倉里から加平につながる道路近くの高地に兵力を配置して、中国軍の進撃を遮断しようとした。そのため、道路の西側である北面梨谷里の677高地にカナダ大隊を配置し、加平川と花岳川が合流する道路西側の北面牧東里の04高地にオーストラリア大隊を配置した。そして、ミドルセックス連隊第1大隊で構成されたイギリス軍の第1大隊を予備部隊として編成した。

4月23日夜から韓国軍第6師団を追撃して南下してきた中国軍第118師団が、道路と溪谷に沿って加平方面へ接近してきた。中国軍は、その日の夜から翌日明け方まで大規模兵力を動員して、オーストラリア大隊が守る牧東里の504高地に攻撃を加えてきたが、オーストラリア大隊は孤立した状態でも陣地を死守して、中国軍の進撃を阻止した。そして、4月24日、夜が明けた後、中国軍が攻撃を止めて引き下がると、追撃して40余名の中国軍捕虜を捕らえた（Dan Bjarnason, 2011）。

さらに、オーストラリア大隊は、戦闘で多数の死傷者が出ただけでなく、中国軍に退路を遮断されたまま包囲されるおそれがあったため、4月24日、イギリス軍大隊の後方に撤収した。中国軍はその日の夜から翌日の朝までカナダ大隊が守る677高地方面に集中攻撃をしかけてきた。徹夜で熾烈な攻防戦が繰り返されたが、

イギリス連邦軍第27旅団は、中国軍の攻撃を退けて、高地を守るのに成功した（Brent Byron Watson, 2007）。

加平戦闘でイギリス連邦第27旅団が3日間、中国軍の南下を阻止して、国連軍は北漢江を境界に防御線を張る時間を確保した。そして、ソウルから春川を結ぶ道路を守り抜き、戦線を分断しようとする中国の計画を阻止したことで、戦況を変えることができた。加平戦闘は、第2次世界大戦でのノルマンディー上陸作戦での貢献とともに、カナダ軍の海外における象徴的な戦闘となっている。

### 3. 「忘れられた戦争」の記憶と民間人虐殺の責任

#### 1) 「忘れられた戦争」から「記憶する戦争」へ

カナダで朝鮮戦争は、長い間「忘れられた戦争」と呼ばれていた。カナダの歴史教科書では、朝鮮戦争は「衝突」や「政治的アクション」などと表記されている。第二次世界大戦後、米ソ冷戦構造のなかで初めて発生した戦争で、カナダでも朝鮮戦争は「正義」や「勝利」のない初めての戦争であった。

欧米圏では、ベトナム戦争が勃発すると、朝鮮戦争の意味が次第に忘れられていき、カナダも同じ状況に置かれた。メディアの戦争とも呼ばれるベトナム戦争では、戦闘場面がリアルタイムで放映された。そのためラジオで放送された朝鮮戦争は忘れられていった。朝鮮戦争に参戦した軍人は、公式イベントにも招待されなかったり、軍人恩給を受給できなかった。

しかし、カナダで老兵に適切な礼遇をして、次の世代に自由と平和の重要性を教えなければならぬという声が大きくなると、朝鮮戦争参戦問題が再び浮上した。特に、韓国系で初の上院議員になったヨナ・マーティン議員の努力が非常に大きい。朝鮮戦争に関する韓国とカナダの共同の記憶を保存しようとする記念碑建設事業と記念行事が、カナダ各地の韓国人コミュニティで開催された（ジャン・ソヨン, 2015）。

2003年、カナダの首都オタワでも朝鮮戦争参戦記念碑が建てられた。2013年、トロント市郊外のブランプトンで開かれた朝鮮戦争休戦60年記念行事は、参戦軍人ら300余名が参加して、盛大

に開催された。特に、このイベントには、カナダ軍の参戦中、最も大きい勝利を取めた加平戦闘を記念して、京義道加平の中高生らが参加した。加平戦闘に参戦したカナダの老兵たちは、自分たちの年金を元手に加平地域の生活保護家庭の学生に奨学金を支給していた。この奨学金を受給していた加平地域の学生たちが、追悼式に招待されたのである（ジャン・ミシェル、2012）。

このような朝鮮戦争の記憶事業の影響で、カナダ政府は朝鮮戦争停戦60周年にあたる2013年に、停戦協定が結ばれた7月27日を「朝鮮戦争参戦勇士の日」と定め、法定記念日に制定した。その結果、朝鮮戦争はもはや「忘れられた戦争」ではなく、「記録された戦争」と位置付けられたと言える。

## 2) カナダ軍による民間人虐殺事件の真相糾明と責任問題

カナダのビクトリア大学のジョン・プライス（John Price、歴史学）教授によると「カナダ軍人が朝鮮戦争当時、民間人を相手にした蛮行は、非常に衝撃的」で、「60件に及ぶ民間人への殺人および強姦、傷害事件が朝鮮戦争期間中に起きた」と述べている（『プレシアン』2012年8月5日）。

カナダ軍による代表的な民間人虐殺事件は、休戦交渉の最中であった1951年9月17日に京畿道坡州農村で発生した申容徳氏家族の殺害事件だ。事件の真相は、以下のとおりである。

国連軍軍人の一群が村の女性を弄び、乱暴を働いた。韓国軍人が彼らを制止しようとする、ある国連軍兵士が彼に向けて銃を撃った。その軍人は突然、申容徳氏の家に入り、申氏を銃で撃った。申氏の息子シン・ヒョンチャン氏も腰を撃たれた。シン・ヒョンチャン氏は、30日間の入院治療の末、一命をとりとめた。

これは朝鮮戦争の時にカナダ軍がかかわった民間人虐殺のなかで、韓国政府に初めて報告された事件であった。1999年に老斤里民間人虐殺事件が世の中に知られるようになり、韓国・国防部が民間人虐殺被害申告を受け付けたとき、シン氏が事件を申告した。彼は村の住民11名とともにこれを告発したが、現在まで韓国政府およびカナダ政府の真相調査は行われていない。

ジョン・プライス教授は、2002年にこの事件を初めて知った後、「カナダ軍による韓国民間人虐殺」事件の調査を始めた。カナダ軍の軍法会議録とカナダの新聞記事などを探して、約60余件の民間人犠牲者関連事件を探し出したという。プライス教授が確認した結果、加害者らは軍法会議で重刑を宣告されたが、カナダに帰国すると全員釈放された（『ハンギョレ』2005年8月11日）。

アメリカ軍による老斤里民間人虐殺事件は、1960年代に遺族によって明らかにされていたが、韓国とアメリカのメディアによって報道されたのは1990年代半ばであった。2000年にアメリカ陸軍当局が真相糾明に応じるまで、約40年の時間がかかった。朝鮮戦争期間中のカナダ軍による民間人虐殺事件については、カナダ当局による具体的な対応や措置はない。

朝鮮戦争がカナダ及び欧米社会で「忘れられた戦争」として放置され、犠牲となった軍人の名誉回復が遅れたのも事実である。遅くなったとはいえ、韓国とカナダ当局が記念事業を通して、朝鮮戦争を記憶していこうとすることは、非常に意義がある。さらに、国連軍所属のカナダ軍による民間人虐殺問題についても、カナダ政府が真相糾明を実施し、責任を認めれば、「忘れられた」朝鮮戦争の暗い部分も同時に記憶することになり、カナダにおける朝鮮戦争の意味を再評価する重要な作業になるだろう。

## 4. 結論：朝鮮戦争の終息と平和構築のためのカナダ市民社会の役割

イギリス連邦軍の一員として第一次世界大戦と第二次世界大戦に参戦してきたカナダには、戦後の新世界秩序形成において、独立国家としてのアイデンティティの確立が必要だった。1950年7月、地名も知らないアジアの小さな国、韓国で内戦が勃発した時、北大西洋国家の一員だと考えていたカナダ政府は、この戦争に介入する必要性を感じていなかった。

ところが、アメリカが朝鮮戦争に積極的に参戦しようすると、カナダも参戦の意志を閣議で決定した。しかし、カナダの派兵は、国連の承認を受けた集団的自衛権の形態を前提にしていた。国際連合の役割を重視することによっ

て、アメリカ中心の世界秩序形成をけん制したのである。

カナダにとって、朝鮮戦争への参戦は、北太平洋国家の一員としてのアイデンティティを新たに確立する契機にもなった。また、アメリカ中心の世界秩序形成に対して、国連中心主義を確立させる重要な契機にもなった。これに対してアメリカは、朝鮮戦争を通じて、新しくつくられた国際連合をアメリカ中心の体制へ変える契機とした。

朝鮮戦争における国連軍の闘いは、アメリカ軍司令官の指揮下で行われたが、中国軍の参戦以降、アメリカ軍の原爆投下による第三次世界大戦勃発の危機が発生した。それに対し、カナダなど国連中心主義の国々は、朝鮮戦争停戦のための対話の場をつくった。東西両陣営が朝鮮戦争の休戦交渉を実施するうえで、カナダは重要な役割を果たしたのである。

以上のように、カナダの朝鮮戦争への介入過程の分析を通じて、朝鮮戦争が国連の承認に基づく国連軍体制で行われ、核戦争の危機を克服した経緯を考察した。また、紙幅の都合上、ここでは具体的な分析はできなかったが、カナダは朝鮮戦争の中盤以降に始まった休戦交渉のなかで、最も問題になっていた捕虜交換についても深く関与していた。当時、反共捕虜と親共捕虜の区別が問題になっており、捕虜の意思と各国の思惑が複雑に対立していた。そのなかで、捕虜の人権を中心とする「自由意志による選択」が捕虜交換の最終交渉案として提案されたことにも、カナダが大きな役割を果たしている。

一方で、カナダ軍による民間人虐殺など国連軍の朝鮮戦争での加害行為に関しては、これまでカナダ政府も、カナダ市民社会も積極的に対応してこなかった。朝鮮戦争では、韓国に侵攻した北朝鮮とこれを支援した中国とソ連に、戦争の一次的な責任があることは否定できない。

しかし、朝鮮戦争中に発生した数多くの民間人虐殺問題に対する国連軍の加害責任も、決して軽く扱われるべき問題ではない。人権と平和、国際主義を強調するカナダのナショナル・アイデンティティが、真の人権と平和精神に基づいて、互いを尊重する国際社会を形成する原動力になるためには、「忘れられた戦争」とされる朝鮮戦争の暗い部分についても、自ら真実を

糾明する必要がある。朝鮮戦争の終結が、東アジアの真の平和構築の一步になるようにすべきだろう。

#### 参考文献

- Hastings, Max. *The Korean War*. First Touchstone Edition, 1988.
- Ted Barris. "The war that history forgot," ed. by R.Guisso and Y.Yoo. *Canada And Korea Perspectives 2000*. The Center for Korean Studies, University of Toronto, 2002.
- Greg Donaghy. "Pacific diplomacy: canadian statecraft and the korean war, 1950-53," ed. by R.Guisso and Y.Yoo. *Canada And Korea Perspectives 2000*. The Center for Korean Studies, University of Toronto, 2002.
- Ara Kermoyan. *Canada and the Korean War*. Art Global, 2002.
- John Melady. *Korea Canada's Forgotten War*. Dundurn; Second Edition, 2012.
- Brent Byron Watson. *Far Eastern Tour: The Canadian Infantry in Korea 1950-1953*, McGill-Queen's University Press, 2007.
- Dan Bjarnason. *Triumph at Kapyong: Canada's Pivotal Battle in Korea*, Dundurn, 2011.
- 朴明林『韓国戦争の勃発と起源1 決定と勃発』ナナム、1999年（韓国語）。
- ブルース・カミングス『ブルース・カミングスの韓国戦争 戦争の記憶と分断の未来』現実文化、2017年（韓国語）。
- 李時雨『国連軍司令部』トルニョク、2013年（韓国語）。
- 南時旭『6・25戦争と米国 トルーマン・アチソン・マッカーサーの役割』青メディア、2015年（韓国語）。
- ステイーブンケイシー『韓国戦争研究の新しい接近』韓国学中央研究院出版部、2017年（韓国語）。
- ブルース・カミングス『韓国戦争の起源』日月総書、1986年（初版）（韓国語）。
- 金東椿『戦争と社会』ドルベゲ、2006年（韓国語）。
- 李重根『6・25戦争1129日』友情文庫、2014年（韓国語）。
- 金学俊『朝鮮戦争-原因、過程、休戦、影響』パクヨン社、1989年（初版）（韓国語）
- 金啓東『朝鮮戦争 不可避な選択であったのか』名人文化社、2014年（韓国語）。
- 大沼久夫『朝鮮戦争と日本』新幹社、2005年（日本語）。

チョソンフン『韓国戦争と捕虜』仙人出版社、2010年  
(韓国語)。

A・V・トルクノフ『朝鮮戦争の謎と真実』草思社、  
2001年(日本語)。

朱建栄『毛沢東の朝鮮戦争 中国が鴨緑江を渡るまで』  
岩波書店、1991年(日本語)。

田中恒夫『図説 朝鮮戦争』河出書房新社、2011年(日  
本語)。

ジャンソヨン「韓国戦争に命捧げたカナダの兵士た  
ち」自由アジア放送(RFA)、2017年6月27日。

ジャンソヨン「韓国戦争とカナダ」自由アジア放送  
(RFA)、2015年6月23日。

ジャンミシェル「韓国戦争の休戦記念行事」自由アジ  
ア放送(RFA)、2012年7月31日。ジャンミシェル「韓国  
戦参戦記念」自由アジア放送(RFA)、2011年6月28日。

ジャンユンソン「インタビュージョンプライス教授 -  
韓国戦争当時、カナダ軍人の蛮行衝撃」『プレシアン』  
2012年8月5日。

「朝鮮戦争時のカナダ軍の犯罪を明かすプライス教授」  
『ハンギョレ』2005年8月11日

『連合ニュース』2018年7月28日